

# おうみぶら版

2018年(平成30年)  
2月24日  
土曜日

本誌編集長 山崎 隆夫  
〒511-1001 三重県津市西町1-1

# 日豪の絆、彦根の地で

## 世界と繋がる近江

昨年12月14日、吹奏楽部はオーストラリアのシドニーにある、イナブラ・スクールの中学生と合同の国際交流演奏会を行った。イナブラ・スクールの生徒にとって、10日間の日本ツアーのラストを飾る最も大きな演奏会である。ひこね市文化プラザで行なわれ、演奏会は大成功。イナブラ・スクールのパフォーマーは素晴らしいものであった。日本の吹奏楽と同じように



近江高校とイナブラ・スクール生徒の記念写真

## ドレミ隊、大歓声に包まれる

我が校には、「ドレミ隊」と呼ばれる白の全身タイツを着て「ドレミの歌」に合わせて腕立て伏せなどを行なうパフォーマンスが存在する。ドレミ隊は10年以上

前に顧問の樋口先生が発案し、一昨年には鳥取県に、昨年には台湾にも進出した。しかし、まだまだこのパフォーマンスを行なっていない場所も多い。兵庫県の尼崎も、そんな場所の一つである。

近江高校は、毎年2月に同地で行なわれる「関西ステージマーチングフェスティバル」に長年出演している。今まで行なってきた演目は、毎年似通ったもので

うな編成で演奏されたコンサートバンドでは、大人数でも迫力のある演奏を奏でてくれた。ビッグバンドの編成に歌を取り入れたステージは観客のライブに似たような、思わず聞き入ってしまうステージだった。合唱では、日本のわらべ歌である「ぼたるこい」をアカペラで披露してくれた。そのハーモニーと掛け合いのすばらしさは、客席にざわめきを起こした。日本の吹奏楽部ではあまり目にするのではない形の音率を肌で感じる事ができ、刺激を受けた演奏会になった。

その夜、吹奏楽部3年生とイナブラ・スクールの生徒で交流会を行なった。まず、とにかく驚くのはその容姿だ。背丈は、女の子でも一七〇センチ以上の子ばかり。そして何より美女が多い。モデルのような容姿は、とても高校生には見えず、本当は学生じゃやないのではないかと思ったほどである。そんな大人っぽい子に話しかけると、私たちよりも年下だったり、「大人の方かな」と思った子が、まさかの中学生だったり。私たちが年齢を聞いて想像するような容姿とはかけ離れていて、本当に驚

あつたが、今年は大きく雰囲気を変え、洋楽でのマーチングと、「ドレミの歌」であった。初めての場所での「ドレミ隊」である。部員たちは大きな不安を胸に練習を積み、あつという間に本書を迎えた。本書当日のステージ上、一曲目を

きを見せなかった。男の子は、高身長である女の子よりもさらに高身長。そしてイケメンが多い。日本の吹奏楽部や音楽系の部活に比べて、男子部員が多かったのが印象的であった。チューバを担当していた生徒の中に2メートルを超える身長を持ち主がいた。珍しがつてツーショット写真を撮らせてくれた。とてもフレンドリーな人で、いつの間にか私たちの人気者になっていた。彼だけでなく、オーストラリアの生徒はフレンドリーな人が多かったため、部員達とも言葉の壁を越えて打ち解けることができた。1日限りの短い時間では

## 逆境のドラムメジャー

ドラムメジャーとは、マーチングの練習をすすめる。本書では指揮やバトンを使ったトリッキングをする。いわばマーチングバンドの顔である。入学した頃からドラムメジャーに憧れていたが私は身長も低く、おまけに運動神経も悪い。メンバーの前で指揮をとり、その顔になるにはあまりにもハンデがあると思いつめていた。しかしひよんなことから高校2年生の冬からドラムメジャーとなった。

すると、やはり困ったことがたくさんあった。先ほど述べたように私は運動神経が鈍い。約1メートルあるバトンを操りながら歩くという事は、部活の練習の一つとして行なわれる大縄跳びもろくに跳べない私には困難だった。一つの動きを覚えるのに1週間以上かかることもあった。ドラムメジャーはパレードの際、指揮棒の代わり



ドラムメジャーの山西天

終えパフォーマンスたちが登場する直前、部員たちの不安は頂点に達した。しかし、いざパフォーマンスが始まると、観客は大きな声で笑い、気前の良い手拍子を私たちに送った。その後、「ドレミの歌」がホールに鳴り響く間、観客の笑顔は

あつたが、育ってきた環境が違っても、住んでいる所がこんなに遠く離れていても、「音楽」という共通点のおかげで私たちは出会うことができた。言葉は通じなくても、音楽だけは世界共通である。「音楽は国境を越える」、そう改めて感じた1日だった。

めず、バトンを動かした瞬間で視指の付け根の皮膚が割れた。絆創膏を貼り練習し、また皮膚が割れ、その繰り返しだった。思えばドラムメジャーになってからは傷だらけの日々だった。軽やかに回っているように見えるバトンだが、実は結構な重さがある。切れのある動きに見せるために力が必要で、何度も体に打ち付けているうちに腕は青紫色のアザだらけになった。憧れていたドラムメジャーの華々しい世界観は練習し始めて1ヶ月で崩れ去った。

経がすこぶる悪い。約1メートルあるバトンを操りながら歩くという事は、部活の練習の一つとして行なわれる大縄跳びもろくに跳べない私には困難だった。一つの動きを覚えるのに1週間以上かかることもあった。ドラムメジャーはパレードの際、指揮棒の代わり

にバトンを振る。手首のスナップを利かせ、指先でバトンを動かす指揮をとる。基本中の基本動作である。これが上手く出来ず苦労した。スナップを利かせる、と言う動作を人生でしたことがなかった。「キヤッチボールするよな感じで」とアドバイスを受けてもキヤッチボールなんて1度もしたことがない。コツが掴

## 文科大臣優秀教職員表彰

今年1月15日東京大学・安田講堂にて吹奏楽部顧問の樋口教諭は「文部科学大臣優秀教職員表彰」を私立学校代表者として林芳正文部科学大臣から表彰を直接受けた。全国の国立私立学校の現職の教職員を対象に優れた成果を上げた教職員を表彰する賞である。

絶えず、最後にはその日一番の拍手と歓声が私たちを包み込んだ。「ドレミ隊」は立派に尼崎で、観客を笑顔にしてみせた。これからも、日本のみならず、世界に笑顔を届けることになるだろう。(3年 元木祐斗)

争う低さである。夏のマーチングでは本来なら全員が指揮を見るはずだが「ドラムメジャーが見えませんか」「指揮が見えませんか」「練習中あちこちから声が上がった。先代ではありえなかった言葉である。

いろいろな逆境をばねにしてやってきた。身長が低いから、バトンを始めたのが遅いから、そんな逆境に打ち勝って近江の顔になることが私が残せる一番の歴史だと思つた。憧れていた世界は本当はアザだらけで、血が滲むものだったけれど、どんなときも諦めたいとは思わなかった。アザと絆創膏とバトンと、そして大切な仲間と過ごした日々は私にとって人生の金メダルだ。(3年 山西天)

樋口教諭の活動は、私が本校在学当時、高校3年生の夏、コンクールで最も大切な時期に、「青年海外協力隊のボランティア活動でモルディブの子供たちに音楽を教えに行く。モルディブは音楽教育が発展途上なんや。」と言いつ年間モルディブへ行き吹奏楽や音楽教育を指導された。正直なところ、樋口教諭が新たに勉強されることは誇りに思っていたが、私たちの学年は「先生に見放された。」と感じていた。

2年の月日が経ち、樋口教諭が戻ってこられた3年後、私も大学を卒業し、母校に教員・顧問として就任した。ある日、樋口教諭が



林芳正文部科学大臣より表彰を受ける樋口教諭

「半年台湾遠征いかへんか？」とおっしゃられたのだが、飛行機が苦手なことから即答で「行きません。」とお断りした。「絶対面白い。国境を越えた音楽。」とこり押しされ、私は嫌々台湾に行くことになった。驚くほど視目的な現地の方々、会話では難しいところもあるが、音で感動を伝えるように世界中を飛び回って「音楽は国境を越える」という言葉を追求され、生徒や部員、そして卒業生に国際的な経験とチャンスを一指引導くださった。樋口教諭の背中を恩師として近くで見ている私は、まず、まだ発展途上の滋賀県でのマーチングを盛り上げ、樋口教諭のようにマーチングの素晴らしさを世界中の子供たちに伝えたいと思う。(顧問 樋口優子)



# 3年ぶり2度目の夢の国へ

昨年11月6日、私たちは厳しいオーディションを通過し、東京ディズニーシーで演奏を行なった。

2年前、私が1年生の時にも、私たちは同じオーディションを受けた。しかし、その時には油断から、オーディションに落ちてしまった。この時、夢の国である東京ディズニーシーで演奏することがどれほど難しい



日々の練習風景（東京ディズニーシー内の写真公開は禁止されています）

かを知った。昨年は、台湾遠征の時期と重なっていたため、オーディションに応募しなかった。そして今年こそはと、もう一度応募することに決めたのである。

準備は本書約3カ月前の夏休みから始まった。私たちは、夏休み中、吹奏率とマーチングのコンクールに立て続けに出演する。そのため夏休みは、毎日朝から夜遅くまで練習をして、その後には振り付け担当の私はディズニーの準備をすることになった。練習で疲れ切った後、演出を考え続ける日々が続いた。振り付けは最初から用意されているわけではなく、一から自分たちで考えなければならぬ。

しかし11月6日日本書当日、ディズニーの控室にいた部員達に笑顔はなかった。前日本来なら正午に学校を出発し、17時頃に東京に到着する予定だった。しかし、高速度道路で大渋滞が起り、実際に東京に到着したのは21時を過ぎていた。長時間のバス移動により、部員達は疲れきっていたのだ。私は、このままではゲストに楽しんでもらえないのではいかと不安になった。そんな状態の中、ディズニーの担当の方から本書の説明があった。本書までの流れの説明があり、最後に一つだけお願いがあるとおっしゃった。「今日皆さんは、我々と同じキャストです。我々の使命は、ゲストの方々に夢を届けることです。今日皆さんは、心を動かすエンターテインメントをゲストの方に届けてください。」私はそれを聞いて、はっとした。今日、自分たちはゲストを幸せにするキャストであり、そこに疲れているかどうかなんて関係がない。他の部員も

同じことを感じたらしく、リハーサル室の雰囲気は一気に明るくなったように感じた。ステージに上がると、たくさんのゲストの方が見に来てくださった。演奏した中の1曲、「レジェンド・オブ・ミシカ」という曲は、今では行われていないショーの曲だ。この曲を演奏することが決まったとき、部員達は口をそろえて「知らない曲だ」と言っていた。しかしいざ演奏を始めた瞬間、私たちが演奏するミシカに合わせ踊り始めたのだ。後から係の人に尋ねると、「ミッキーが昔のミシカのショーを懐かしがって踊っていたんですよ。」と説明された。ミッキーとともにパフォーマンスできることに喜びを感じた。

2回目のディズニーでの演奏という、先生や保護者からのプレッシャー、3年生の今年こそはという気持ちの強さ、そして夢の国で演奏したいという思いが重なり本書は大成に終わった。

ゲストとしてではなく、キャストとしてディズニーの世界に関われる、2度とないような貴重な経験ができた。

(3年 平居朋也)

海外ボランティア活動報告

近年、国際社会において活躍できる「グローバル人材」を学校教育の中で育成することが重要になっていきます。そのような中で、まず教員自身が異文化の中に身を置き現地の人とコミュニケーションを行ない、自らが「グローバル人材」

になる必要があると考え、今回ボランティアへの参加を決意しました。8年前、日本政府のSDG(持続可能な開発目標)により、独立行政法人国際協力機構(JICA)が実施するボランティア事業の中で、青年海外協力隊として2年間モルディブ共和国へ赴きました

アカデミーの吹奏楽

昨年の4月から、私たちに新たな仲間が加わった。彼女の名前は吉本千枝、我が校きつての進字コース、「アカデミーコース」唯一の部員である。アカデミーコースは、他のコースとは異なり、授業が8時間目まで有り、さらには土曜日にも講座を行なう。

しかし、彼女はそのような忙しい学校生活を送りながらも、毎日の部活をこなさない。8時間目の授業が終わった後、必ず部活動に参加するのである。顧問の先生の話によると今までアカデミーで部活動を3年間

やりきったのは1人しかいないそうだ。彼女なら2人目の達成者になってくれると思う。

(3年 田口拓吏)

応援団賞を目指す

春の甲子園に、我が校野球部が3年ぶり5回目の出場をすることになり、潜在中充実した毎日過ごすことが出来た。今回の活動の中心であったエドナマンレー芸術大学はジャマイカで唯一、音楽科がある大学です。日本の音楽大学のようなクラシック音楽中心でなく、ジャズやレゲエを好んで演奏する学生がほとんどです。この大学ではトランペットの個人レッスンを中心に行ないました。金管楽器の専攻はトランペットの3人だけですが、驚くことにトランペット専攻の学生が在籍しているのにも関わらずトランペット専門の先生はいません。学生の1人は優秀でありクラシック音楽に強い興味を持つ大学の中では珍しい存在で、日本の音楽大学でも十分に通じる

レベルです。日本の奏者とは根本的な耐久力が全く違うように思いました。もう1人はジャズを中心に演奏している学生ですが、即興演奏も軽々なし高い才能を感じました。

毎回思うことですが、このボランティアでも強く感じたことは「音楽の力」です。音楽の盛んな国ということもあるかもしれませんが、コンサートと一緒に演奏しても、楽器の指導をしていても、強い繋がりを感じました。そこには国も、人種も、宗教も関係がないと本当に思える瞬間でした。このような体験を次世代に伝えていくことが私の使命であると思っています。

(顧問 樋口 心)

## マーチングダイエット

入字直前、私の体重は80キロ近くもあった。毎日の塾帰りに買ってもらった、コンビニのチキンが原因だった。

1年生の夏、マーチングシーズンになり、このままではいけないと思い始めた。厳しい練習、先輩、そ

して体を壊す筋肉痛、毎日がとても辛かった。そんなある日、久しぶりに体重計に乗った私は目を疑った。なんと体重が25キロも減っていたのだ。

マーチングシーズンが終わると、樋口先生に「お前、痩せたなあ、ダイエットの本出せるくらいやなあ」と声をかけられた。痩せたことを人に初めて気付かれたので、とても嬉しかった。その日から本当に本を出版しようとして、行なったトレーニングを書き起こした。そしてマーチングは最高のダイエット方法であると確信した。

しかし、ダイエットと言

うものには、リバウンドと

いうものが付きものである。3年生のマーチングシーズンが終わった後、私の体重は急激に10キロも増えてしまった。痩せた時から、生活習慣は変えていない「はず」なのに、よく考えると最近またコンビニでチキンを買ってしまっている。原因に気付いたときにはもう手遅れだった。最近、怖くて体重計に乗れない。

(3年 伊藤 志)

暗い中を歩いてはいけないと感じ、夕方以降外に出ることはほとんどありませんでした。

ボランティアの活動内容は、午前がエドナマンレー芸術大学、午後は近隣の中学校を巡回し指導、夜にはコンサートのリハーサルが入

場をすることになりました。もちろん吹奏率も全力で応援をさせていたいただきます。

春の甲子園は「応援団賞」というものがあります。これは夏の大会にはありません。第70回大会(一九九八年)から導入された賞で、野球の勝敗は一切関係なく、優れた応援に贈られます。ちなみに滋賀県では第81回大会(二〇〇九年)で彦根高校が応援団賞の中でも最も優れた学校に贈られます。せっかく野球部に、この賞を取るチャンスをもたらしたので、工夫を凝らした応援を目指します。

野球部のプレーだけでなく、ぜひ応援にも注目よろしくお願いします。

(2年 吉岡 蓮)



リバウンド前の伊藤志



エドナマンレー芸術大学で指導中の樋口教諭